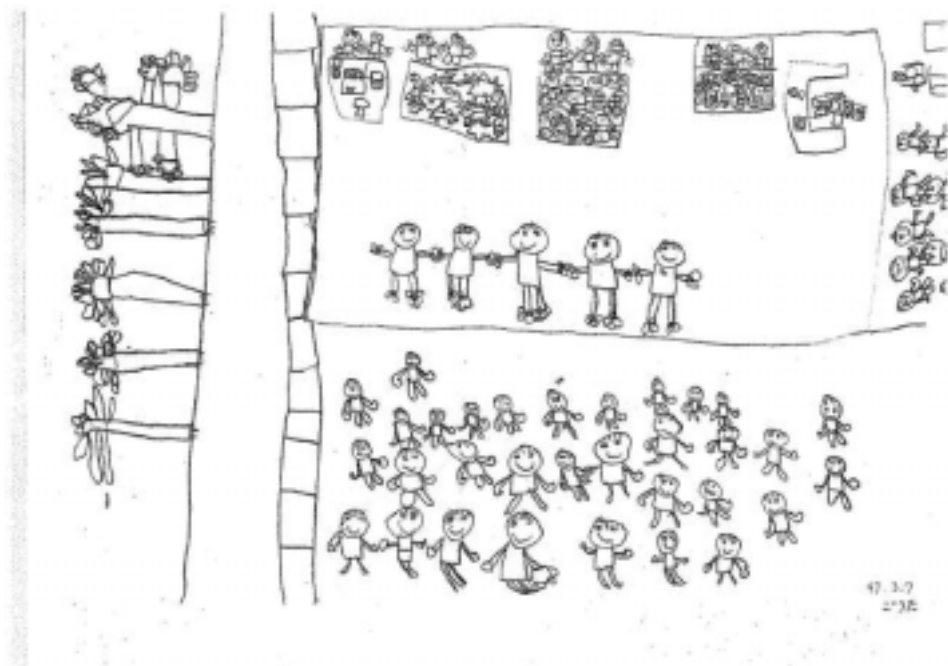
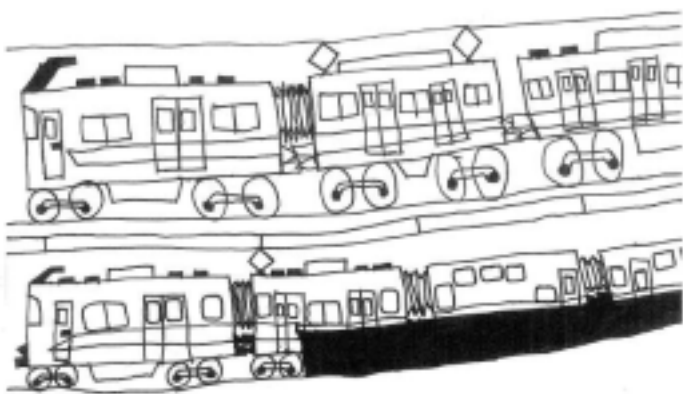


千葉県次世代育成支援アクションプラン 策定作業部会から



絵：ながまつ こうた



絵：ふじい ともりの

～ 次世代育成支援行動計画の目指すもの～

1 「新しい地域力（ちから）」こそ次世代育成の鍵

次世代育成支援行動計画は、日頃、さまざまな立場で乳幼児やその父母、青少年とかかわり、次の世代の育成について深く考えてきた県民自らが策定作業部会の委員になって、それぞれの立場から、その想いのタケを率直に交換しながら、白紙の段階から創り始めた計画です。また、県内各地で開催したタウンミーティング等を通じ、地域に住むたくさんの方々から意見をいただいてさらに内容を深め創り上げた計画です。

この計画は、先に策定された千葉県地域福祉支援計画の子どもプランにあたるものです。千葉県地域福祉支援計画では、キーワードを「地域力（ちから）」としました。私たちはこの考え方をもう一つ進めて、新しい時代の力を、「新しい地域力（ちから）」にとらえ、世代を越えて、“いろいろな人たちが相互に関わり合いながら、「新たな地域像」の実現を目指す”ことが次世代を育成するうえでなによりも大切なことであると考えています。

そのために、一人ひとりが主人公になって次世代育成に必要な「人づくり」と「関係づくり」の輪を確かなものとして創り出し、つなぎ広げていくというアクションを、自分たちで自分のまわりから始めてみるのが次世代育成の鍵となると考えています。そして行政は、あらゆる可能性を調整して、主体者である県民（住民）を制度的にバックアップ（健康福祉千葉方式）するという新しい関係を、県民と行政の協働で創り出すことが、「新たな地域像」の実現につながると信じています。

2 次世代育成支援行動計画の目指すもの

～ 共に育てる喜びを地域に創る～

これまでの経済最優先社会のありようを見直そうとする動きが、戦後60年を迎えようとする今、芽として吹き始めています。この次世代育成支援行動計画も新しい社会（地域）を実現していくための大きな役割を担っています。

子育ての第一義的責任は、父母その他の保護者にあることはいまでもありませんが、次世代育成支援行動計画ではそのことを踏まえ、子育てを単に家庭における私的な責任に終わると捉えることなく、子どもや子育て中の人、あるいはこれから親になる人も含めて、“親が親として育つことを地域が支える”という大きな責任の視点を持つことが重要と考えています。地域のいろいろな人が子育てに関わり合い、地域のみんなで子どものことを考えます。障害のあるなしや、男と女、子どもとか高齢者といったこれまでの枠組みで捉えてきた関係を越えて、お互いが交わり合い、それぞれの得意なことを発揮し合いながら、知恵や経験を出し合います。そして、地域の中でそれぞれが存在感を実感しながら、子育てを応援していく関係が今必要なのです。関わり合い、育ち合いを通して、家庭と地域で子育ての意義が語られ、深められ、共に育てる喜びが実感できるような関係作

りの実現がこの計画の目指すところです。また、子どもの最善の利益を考え、子どもが子どもとして生きることの権利を守るための条例づくりの必要性についても検討していくべき課題です。

3 子育ての環境はなぜ変わったのか

高度経済成長の社会が到来する以前は、生活は貧しかったけれど、都会の川でも魚釣りができたり、水遊びができました。夏の木立にはセミがいるのが当たり前で、あちこちにあった原っぱには、野の花も咲き、子どもたちの遊び空間も沢山残っていたので、群れて遊ぶ子どもたちの声が、一番星の出る夕暮れまで表で響いていました。

このような子どもたちの原風景とも言える景色が、経済発展と共に姿を消したのは、物とお金が効率よくまわるしくみばかりを追い求め、主役である人間の営みを片隅に置いてきたためです。人間として、本当は大切な“生命が生まれ、育ち、人と共に生きる、自然と共に生きる、そして生命を引き継ぐ”ということが、経済性の対極としてネガティブに扱われてきた時代が高度経済成長時代です。

70年後半の低成長経済社会では、産業も製造業中心からサービス産業中心へと構造転換をし、グローバル化した経済の中で競争は激化し、終身雇用制度の崩壊やリストラ、単身赴任などが広がって、家庭や家族を維持することや子育ての負担が母親に一層のしかかるなど、変化が加速しました。

戦後の2度にわたるこのような経済構造の激変で、働き盛りの大人たちの時間のほとんどが、仕事に吸収され、子どものまわりや地域社会を構成する共同体の風景から大人が消えてなくなりました。また、都会的でスマートな人間関係や生活スタイルが好まれ、匿名社会の気楽さが益々人と人の関係を弱めました。そして同時に核家族化が進み、大家族で支えてきた子育てのバックアップ機能も弱くなりました。

これらのことにより、地域や家族の支えのない「母親だけの育児」という人類が初めて出会うこととなった経験や、孤立した家庭の状況がたくさん生まれ、児童虐待など深刻な問題を生み出しています。

4 身近な他人の力を借りるという発想を

千葉県地域福祉支援計画では、「新たな地域福祉像」を 誰もが、ありのままに、その人らしく、地域で暮らすことができることとしています。

また、そのために、地域社会においては、互いの違いや多様性を認め合いながら、「共に生きる社会づくり」のために、地域住民相互の連帯と、全ての人に地域社会への参加・参画を促すとしています。

そして「新たな地域福祉像」の実現のためには、人と人が交わりあうこと、関わり合うことを重視しています。そして、「逆転の発想」の一つとして、高齢化社会をマイナスのイメージでとらえることなく、高齢者の存在と増加こそが、地域を活性化させ、地域の負担を減らすとしています。

そこでこの計画では、高齢者ばかりでなく例えば商店の立場でできること、農

家の立場でできることなど地域にいる人に目を向け、身近な他人の力を借りて次世代育成の応援システムを創りだすことが重要と考えました。

5 子ども力が地域を変える ~つなげる力を子どもに助けてもらう~

この計画では、さらにもうひとつ逆転の発想を取り込みたいと考えます。それは“子はかすがい”という言葉です。まさに子を「かすがい」=「接着剤」にして、人と人をつなぎ交わらせるということです。今は、子育て親子は家庭あるいは保育園・幼稚園、学生は学校、社会人になれば定年まで会社、その後はゲートボール場や生涯学習教室などと、世代が輪切りで別々の生活圏を作っています。

子どもは地域の人と人を結びつける力をもっています。その力=「子ども力」で世代間をつなぐという発想です。そのためにも、子どもの周りに大人が出向くことと同時に、同じ時代を生きる仲間として、子ども自身が社会(地域)に参加、参画していく場を用意することも重要です。

6 10年後はこうありたいの実現をめざして

私たちは、この計画の策定にあたって、「10年後の地域社会はこうありたい」をイメージして、意見を出し合いました。その意見の中で、みんな自分のことを守るのが精一杯、自分が輝くことには一所懸命で、他人のために輝く余裕がないのが現代の社会であるというのがありました。私たちはこの計画が見据えている10年の中で、子どもを社会の宝として、地域みんなで支える子育てを実現したいと考えています。地域にいる人同士がお互いに顔見知りになって、子どもや子育て、あるいは地域社会のために輝いている自分に気づき、関わり合い、学び合い、皆が子どもを愛し、子どもは皆から愛されていると実感できるような社会に近づきたいと考えています。

ところで支援というと、地域(身近な大人)から、子ども、子育てへの一方的な支援を考えてしまいます。実はひたむきに遊ぶ子どもたちが身近にいてくれる、子育てに喜びを感じて明日への希望につなげてくれる親子がそばにいてくれることで、地域もそこから元気をもらえるのです。

この次世代育成支援行動計画は、子どもや若者の健やかな成長と自立性を保障し、ひいては世代・男女・職業・立場の違いを越えて共生できる社会を実現するための指針となるものです。

平成 17 年 3 月

千葉県次世代育成支援アクションプラン策定作業部会

